琉球大学学術リポジトリ

3. 小学4年生を対象とする事例　ーワークショップー

メタデータ	言語: 出版者: 島袋純 公開日: 2012-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉我知, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25058

Ⅲ．小学４年生を対象とする事例　－ワークショップ－

沖縄リサイクル運動市民の会　呉我知　浩

島袋：授業を開始したいと思います。先週は小学校３年生の授業に関わっているＮＰＯの方々に授業を振り返るというワークショップをしました。今度は小学校４年生を対象とする授業を担当してくださっている沖縄リサイクル運動市民の会の古我知浩さんです。沖縄リサイクル運動市民の会は、首里の鳥堀町にあります。横山さんの最初の授業を受けて、小学校３年生は自然を楽しむ、４年生のほうは、特にゴミの問題。身近なゴミの問題から環境に取り組んでいこうということです。それで、今日は１時間から１時間 15 分ぐらい話してもらって、その後、質疑応答をしたいと思います。この授業についてもまた次の時間に、振り返りを行って、分からない点をどんどん潰していき、最後にまた横山さんのほうに疑問点を探ってみたいと思います。では、古我知さんよろしくお願いします。

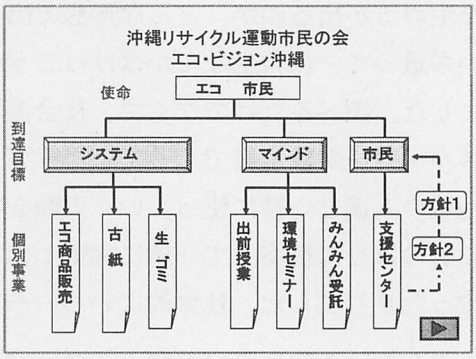
古我知：こんにちは。（学生：こんにちは）。あーすごいな、返事がいいな。大学の授業で何度か挨拶したとき「こんちには」って返ってきたのが今日初めてです。みなさん、たぶんいい先生になれるなと思います。今紹介してもらいました沖縄リサイクル運動市民の会代表の古我知といいます。よろしくお願いします。古き我を知ると書いてね、古我知と読みます。よろしくお願いします。お題としていただいたのが、宇栄原小学校での私達の授業の紹介というか、報告をしてくれということだったのですが、残念でした。宇栄原小学校で僕らがやらせてもらっているのは、僕らが開発した買い物ゲームという授業を中心にやらせてもらっています。今日はその買い物ゲームの解説を含めてちょっと流れを紹介させてもらいたいなと思っています。本当は教室の後ろに道具を持ってきて、みなさんに体験してもらえると一番良かったとは思うのですが、諸般の事情によりそれは無しにしました。僕の話を聞いて、興味をもった方、興味をもったじゃなくて、ぜひ興味をもってもらって、一緒に小学校の授業を手伝ってもらいたいなと思っています。僕らはこの授業をだいたい今まで年間 60 から 80 クラスぐらい実施しています。ですから、今日の話を聞いてやってみたいとちょっと騙された人は、ぜひ、この後募集要項を配りますので、一緒に授業に参加してもらえればという期待を込めて、今日は解説だけにとどまりたいと思います。買い物ゲームの解説だけだと正直ちょっと時間を持て余してしまうので、私達の活動紹介を前半にさせてもらいたいなと思います。というのは、僕らのやっている事業はこういう内容です。プログラムはこんな感じでやっています、というと、ＮＰＯがやっている事業の意味っていうのがあんまり分かんないのかなと思って。伝わらないかなと思いまして。僕らがもっているバックボーン、活動、その他諸々のものを少しでもみなさんに理解していただいて、「あっそれでこういうことをやっているんだ」「この人達単に物好きとか暇人じゃないんだな」「いろいろ事情があってこういうことをやっているんだな」っていうのが、少しでも分かってもらえればいいかなと思います。なので、前半に私達の活動の紹介をさせてもらおうかなと思っています。１つエピソードを。以前、名護の方で島サミットというのがありましたよね。アジア太平洋諸国の首脳とか、環境大臣とかを日本に呼んで、経済支援や環境問題をどういうふうにしていこうかという首脳会議開いていたんですが、そこに日本の環境団体がどういったことをやっているか、ということを紹介し

てくれということで、外務省から依頼を受けて、各国首脳に対して３分ほどですが、私達のプログラムの説明をするという機会を得たことがありました。私が「買い物ゲーム」というのはこういう素晴しいプログラムですよ、と説明をしたらツカツカと、あの当時の小泉首相が来て僕に言うんですよね。「何でこんな面倒くさいことやる？」って。「ダメなものはダメって言えば分かるじゃないか」って。「何でこんなまわりくどいことをやるんだ。」と。やっぱり日本の首相っていうのは忙しくてせっかちだなと思いました。偉そうにあんまり教育のこと僕は言えなのですが、頭でこう、これは良いこと、これは悪いこと、こうしなさい、ああしなさいだけでは人間行動しませんよね。分かっちゃいるけどやめられないというのが環境問題のいつものジレンマです。それをどうやって伝えて、心に響かせて、少しでも行動するようなものをやっていくかっていうのには、やっぱりいくつかのステップを踏みながら伝えていくっていう手法も大事じゃないかなぁ小泉さん、って思ったんですけど。ほとんど僕の話聞かないで「あーあーあー」って持論を述べてさっさとまた次に行きました。

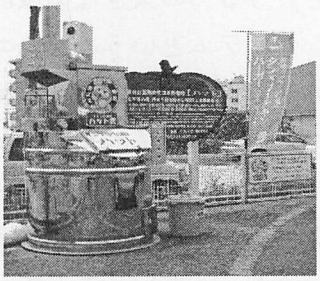
それでは、僕らの活動紹介のほうから少し入らせてもらいたいと思います。先生のリクエストには答えきれなくて申し訳ないのですが、ちょっとだけあのプチ自慢。僕は 20 年活動していまして、特に、あんまり環境教育とか環境学習とかいうものには、たいしたことをできる団体ではありません。ただ、目の前にある問題をみんなに伝え、一緒に行動してもらいたいという想いだけでいろんな活動してきました。その中で買い物ゲームが、数年前に「グリーン購入大賞」というのをいただきました。それから環境省の環境白書にも買い物ゲームということで紹介してもらったり、消費者環境国際ワークショップ、国際っていっても６ヶ国ぐらいしかいないんですが、アメリカ、ヨーロッパ、中国とか、そのくらいの国々の人達が集まって、これからの環境教育をどういうふうにしていこうかということで事例発表させてもらったり、少しずつそういったところで発表する場をいただくようにはなってきました。僕らが活動し始めた当初、これ見えますかね。離島のゴミ捨て場ですけど、こういうふうにゴミの山がきれいな海岸線を覆っていくというところが、あちらこちらにありました。きれいな海の向こうに、奥のほうからちゃんと捨てて下さいよと、そういった状況が沖縄のあちこちにあります。奥のほうっていうのはできるだけ海に近くに持っていって捨ててねと、そうすれば台風がきたら波がさらってどっかに捨ててくれるからということです。産業廃棄物、タイヤ、いろんなものがいっぺんに捨てられているような状況です。最近はいわゆる最終処分場も少しずつ補助金で整備はされてきたのですが、那覇市も、ついこないだまでは、ゴミがこうやって最終処分場に原形を残したままそのまま捨てられて、生ゴミもこの中にいっぱいあったりして、雨が降ったらこの泥水が地域の畑とかそういった所に流れ込んだりで、いろんな問題がありまして、特に、前城さんなんか役所としては苦労されたと思うのですが。そういう問題があって地域住民が怒りだして、ゴミの搬入を阻止するとかということでいろんな方々が抗議に行ったりするというような時代がありました。今はだいぶよくなりました。あるいは、市民のゴミの出し方が悪くて、知らないでボンベかなんかをそのままゴミの中に入れて、これをパッ

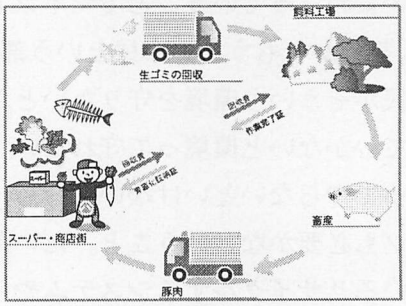
カー車というゴミを集めるトラックが、中で圧縮しますから、その圧力がかかった時に爆発し、燃え出したという事故がいろいろありました。そうした中で僕らは少しでもゴミを減らしてエコロジカルな社会をつくっていきたいなということで、20数年前から活動を行っています。

僕らのミッションを挙げると、ミッションとしてエコロジカルな市民社会をつくっていこうということを大きな目標に、到達目標というか、活動領域として、システムという部分とマインドという部分、市民社会をつくろうという３つの大きな領域に分けて今事業を進めています。システムというのがエコロジカルなシステム、社会システムをつくっていくための事業をしていく。いくらシステムとか、法的な整備が進んでも、やっぱり環境って大事だよねと思う心とか、そういう価値観がみんなに伝わっていかないと、芽生えていかないと環境って守れないよね、っていうことでマインドの部分でも何かしよう。それからもう１つ市民という部分では、環境を守ろうと行政や企業がいろいろやっていても、市民がそういう環境を守りたいとか市民のパワーが、もっともっと市民セクターがパワーアップしていかないと環境って守れない。現実問題がいっぱい出てきます。市民の力で最終的には体を張って守らないといけない部分も、沖縄ではいっぱいあります。ということで、市民パワーのアップも必要かなということ。だいたいこの３つの領域の中で、この下に個別事業ということでいろいろリサイクルするシステムやら生ゴミをリサイクルする仕組み、それから出前授業で買い物ゲームとか、環境セミナーをやる授業とか、こういった事業をいろいろと行ってきています。また、フェアトレードというような。那覇市の NPO 支援センターも私達が、今年度いっぱいは指定管理者としてここの管理・運営を行ったりしています。それから NPO 向けのマネージメント講座等々も行っています。それから地域と一緒に環境ワークショップとか、こういったものをやりながら地域の環境問題を一緒に考えていこうというようなことも行っています。それから教師のための環境教育講座ということで、夏休みに先生方向けに NPO のもっているプログラムを紹介したり、お互いに意見交換をしあったりするという場をつくってきました。これがなかなか先生方の参加を得にくくて今ちょっと苦労しております。いろいろやっていますが、特に私達が今この５年ほど力をいれてきたのがゴミの減量です。数年前から南風原と那覇市との間で、最終処分場とか、いろいろもめたな中で焼却炉をどうするか、最終処分場をどうするかという話の中で、僕らも市民団体としては行政に対してもっと具体的な提案をしていこう、ということでかなり力をいれていろんなことをやってきました。シンポジウムに出ても、当時那覇市としては 600 t から 650 t ぐらいの焼却炉をつくろうと言っていたのを、僕らとしては 400 t ぐらいで十分じゃないかというふうなこととかですね。それによって、経費を浮かしてもっともっと循環型社会を築いていくためのことに主をおくべきじゃないかとかいうふうなことを言ってきました。言っただけじゃ誰も相手にしてくれないですから、自分達でゴミを減らせる仕組みを実際に提案していこうよ、ということで当時一番ゴミの成分の中で多いとされていた生ゴミと紙類。特に生ゴミを減



量していけば大きなゴミ減量効果が上がるということで生ゴミにターゲットを絞って、大きな活動をしてきました。これ生ゴミです。よく見ると林檎とかキャベツとか茄子とかいろんなものがあります。これが毎日大量にスーパーマーケットから出ます。みなさんもよく購入されていると思いますけども、コンビニからのおにぎり等、こういったのがもうほんの 2、3 時間前まで棚に並んでいたような商品です。まだ十分食べられます。こういったもの時間がどんどんくると処分されていきます。こういったゴミが大量に出てくるので、何とかしていきたいなということで、地域の人達に集まってもらってワークショップを開いたり、それからたぶん琉大の教育学部の学生達だったと思いますが、一緒に商店街から出てくる生ゴミの量を調査しました。どこからどんな生ゴミが出るのか、どんな形態で出るのか、量はどのくらいぐらいあるだろうというのをいちいち量って、琉大生なんかはけっこう頑張っていろいろ調べてくれました。調べるだけでなくて、社会実験もやろうということで、モスバーガーが駐車場でもっていた生ゴミ処理機を地域に開放して、地域の人達と一緒に使っていく実験をしましょうよ、ということでお店のほうに提案して一緒に実験したりですね、そういったこともやったりしました。社会的にいろいろ実験もしましたが、仕組みをつくらないといけないかなと、スーパーが出してきた生ゴミをちゃんと回収して飼料や肥料をつくって、もう一度それを使っていく。よくあるやつですよね。みんなこういうものをつくればいいというような。そういったものを僕らも実際の数値を基にこういったものをつくって提案しました。那覇市長に提案して、一緒にやってみましょうかというところまで話はきましたが、なかなか行政の難しいところですね。自分達でこの環境の輪をつくっていこうと。循環型社会を市民の手でつくっていこうよと。その方が気持ちよくできるからということで。宣言しまして、私がやりますと言ったのですが、これがなかなかやっぱりうまくいきませんでした。3日で落ち込んでしまいました。生ゴミ出しているところの飲食店組合とかそういったところに行ってお願いしたら、関係者のみなさんの利害が違うのですね。「生ゴミ出して下さいよ」って言ったら、「いつ生ゴミ取りにくるような者に出せるか。うちは客商売しているのだから、そんな臭いものさっさとどっか行ってもらわないと困る」「いちいち分別しているヒマないのだから、ゴミ屋さんに言えばみんな一緒にもっていってくれて楽だからその方がいい」とか。ゴミ回収する方はまた回収する方で、「あんなこまめに、お店の言うとおりいちいちこまめに回っていられるか」と言うし。養豚業者は「そんな何が入っているか分からないようなものを豚の餌にできるか」ということで。みんなにそっぽを向かれてしまいました。やっぱりちょっと無理かなと思って、この時はやっぱり少々落ち込みましたね。市民がやるとか、NPO がやるなんてやっぱり幻想かなと、自分の力の無さを思い知らされましたね。いつ夜逃げしようかなという感じでした。そんな時に、夜逃げのいい機会がありまして。ちょうどアメリカの国務省から一ヶ月間アメリカの NPO、特に環境教育とか、廃棄物に関連している団体を研修する機会をもらいまして。行ったら、すごいですね、やっぱり NPO 大国アメリカ。人口 50 万ぐらいのある都市なのですが、そこのゴミの資源化を NPO が、その市の半分を NPO が引き受け





て減量化するということを、ちょうど、僕が行ったところもそのプロジェクトが始まったばっかりでした。それで、ゴミを減らすということでこんなオンボロのトラックに変なかごをひっつけて、日本だったらこれ道路交通法違反でひっかかるような、こんな集め方しているのかなと思うようなちょっと情けないような集め方ですけど、これであの都市のゴミを20%削減するという目標を抱えて非常に頑張っていました。後ろからアメリカ最大廃棄物関連企業の素晴らしい近代的なトラックで横からアームが出てきて、ゴミの容器をガーッっと上にあげるような、近代装置もっているのと、一生懸命戦っている姿を見ると、やっぱり俺もやっていいのかなと自信もってやりました。よく言われる、日本のNPOもよく使うのですが、行政だけの独占物じゃない。私達市民にも行動する権利があるんだというようなことを当時言われて、同じようなことをアメリカのNPOが言っていて、まさに現場で苦闘しているNPOからこういうこと言われると、ズシンときました。ちょっとおっちょこちょいかもしれんけど、俺だってやっていいという自信をつけて帰ってきていろいろやりました。それで始めたのが、とりあえずいろいろゴミを出してくれるところにお願いして、「こういう状況なので分別してきれいに出してください」という表もつくって、「ゴミを出したら後で持っていった人達が、分けるのに非常に苦労して時間かけて大変です」というのを一生懸命説いてやりました。これも分けてもらったのはいいけど、今度はゴミを出すところもなくて、こんなにいっぱいで、それでゴミ捨て場をきれいに分けて生ゴミの置くところと普通のゴミを置くところをきれいに分けましょうということで、何度も掃除しに行って、分けてゴミの分け方までやりました。そうすると従業員のほうにもいい感じに伝わってきて、企業としてもゴミの量が減ってきたとか、従業員の教育に非常にいいという形でだんだん進んでいって分別が非常に良くなりました。分別が良くなった時は、次は餌づくりです。本当に安全でおいしい豚が育つための餌はどうやってつくる、ということでさんざん研究しまして、何度も分析をして、ゆったりしたスペースの中で育てながら、測定もしょっちゅうしながらですね、データを日大の先生と神奈川の畜産試験場の凄い人達がいろんな分析をしてくれたりしながら、いい餌のつくり方をアドバイスしてくれまして、おかげで大変おいしいものができまして、試食会を何度か開いたりした中で、去年ぐらいからハーバービューホテルも加わって料理のメニューをつくってくれました。うちで育った豚で「ちむじゅらさん」という料理を出したら、日経エコロジーでも取り上げてもらって今全国的に、これを食べたいがためにハーバービューホテルに予約を入れるという、非常に宣伝になったということで、私も日経エコロジーで全国デビューしまして、沖縄の食材を使いながら、しかも循環で育った豚でおいしい豚ができるようになりました、というので是非買って下さい。僕らがやりたかったのは豚を育てるということだけじゃなくてエコロジカルな社会をつくっていくために、いろいろそういった動きをもっともっと理解していただきたい、あるいは一緒に参加してもらいたいということでやってきました。あの豚をどうやれば売れるだろうというのを、県内各大学の学生達に3ヶ月間プロのマーケティングの人達をつけて、こうやればあの豚は売れるでしょうという企画案を練ってもらって、企画コンペをしました。残念ながらいい案がなくて採用には至らなかったのですが、ユニークな面白い、また学生達もそういった環境問題に今まで起業したいとか、ITで何か一旗あげたいと言っていた学生達も、違った面で非常に面白がってこういったものに参加してくれました。それから、やっぱり同じような問題意識をもって豚を飼っている人達を全国から集めて、沖縄で全国養豚会議みたいなのを開いてもっともっと自分達のノウハウを高めると同時に、こういったものの重要性を社会に訴えていこう、と

いうような活動をしてきました。これはこの間の新聞に載っていましたが、ハーバービューホテルも今度エコツアーというメニューをつくって、循環の輪をお客さんや従業員、取引業者の人達にも社員教育をしていくということでやっています。そういうふうに企業とも連携できる部分は連携しながら、事業を進めています。これはこの間 JICA の研修した時の写真です。これも宇栄原小学校とかでやったものですね。その後、子ども達の食育も兼ねて、一緒に餃子をつくったり、ソーセージづくりをしたりしながら、何とかこの食の連鎖というのをうまく子ども達に伝えていくプログラムをつくっていこうということで、いろんなことを試行錯誤してやっています。

ここまでの話を聞いて「あれ？」ってちょっと思いませんか。「古我知さんって何で食っているの？」とか。「えっ、あれだけいろんな活動しているみたいだけど、どうしているの？」という疑問はないですか。なければありがたいですが、だいたい企業の人とか、自治会の人達に、僕達の活動をお話しすると、このへんで、「あれ？」というような首をかしげるおじさん達が 2、3 人ちょこちょこといるんですよ。聞いてみると、「お前ら何で食っているのか？」「NPO っていったらボランティアだと思っていたけど、お金はどっから持ってきている？」とか、そういうような人達が多いです。当然な話かなと思いますが、僕達の活動スタイルは事業型 NPO というやり方です。自分達でお金を稼ぎながら、自分達が理想とするような世界を構築していこうということで、片手にそろばん、片手にポリシーを持ちながらやっていっています。今のところ、年間予算がだいたい四千万から、多いときは一億超すときもあります。そのぐらいの予算でやっています。専従スタッフが 8 人、ボランティアで登録されている人達が 50 人程度おります。そういった人達の力を借りながらいろんな事業、行政からの委託もあります。NPO センター等の行政からの委託みたいなものですね。そういった事業とか、あるいは自分達でフェアトレードのいろんな商品を売ったりしながら、あるいはさっき話したような豚を売ったりしながら、それで稼ぎながら自分達の想いを遂げていこうということでやっています。ですから、残念ですけど買い物ゲームを各学校へ行って出前授業しているのもタダではやりません。基本的には行政のごみ担当部署、社会福祉協議会、あるいは別の企業からのお金をいただきながら出前授業を進めています。

ここでやっとやっと買い物ゲームの話なのですが、最初に言ったように僕らが伝えたいのは、ゴミの量がいくらだとか、化学分析がどうだとか、そういうことではなくて、ゴミを無くすためにどうしたらいいのか、環境問題に、分かっちゃいるけどやめられないこの生活を、どっかで少しでも、できる部分で変えていこう。それを少しでも育つような教育をしたいなということでやってきました。この買い物ゲームの最初につくる時にお世話になった山本さんも来ていますが、まだ稼げない時代に一緒に一生懸命になってつくってくれました。環境省がつくったビデオをみてイメージをつかんで下さい。買い物ゲームというこういう本も出版しているので、関心のある方はぜひ購入して下さい。少々高い本ですが、やり方を全部丁寧に解説しています。

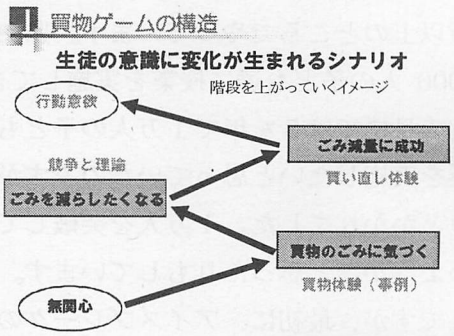
買物ゲームの解説本　出版

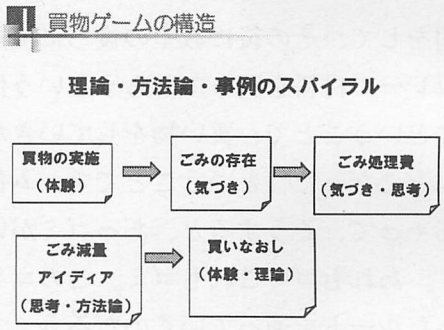
買い物ゲームは、だいたい小学校４年生から５年生、４年生だと正直ちょっとまだ厳しいかなという感じですが、だいたい４年生を中心にやっています。というのは、小学校では４年生がゴミのことを授業でやるの

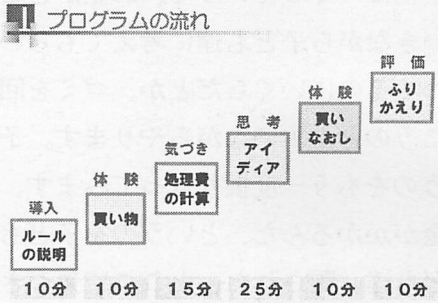
で、それを狙ってやっています。今までに約 300 ヶ所以上のところでやっています。県内ではもう 12,000 人の子ども達に授業を実施してきました。当初の目標では５ヶ年で１万人の子ども達にこの授業を実施したいと思っていたのですが、５年ちょっとかかりました。１万人を突破してそろそろやめようかなと思ったりもしています。ゲームの流れですが、最初に、アイスブレークのようにしてゲームのルールを説明していきます。ゲームの説明をして、その後に教室の後ろに模擬店をつくります。模擬店舗をつくって、それで子ども達にカレーの材料を買ってもらうという仕組みです。子ども達は一生懸命買い物に行きます。我、先にということで、買い物をしていきながらカレーの材料を買っていきます。おつりの多いチームはどこだった、ということでチーム毎に競っていきます。ここが罠ですね。みんな安いもの買っちゃって、そうすると、あっゴミがいっぱい出てきたということで子ども達は気づいてしまいます。あれもゴミこれもゴミ。このゴミを処理するのにどのぐらいお金がかかるだろうか、どういったルートを通っていくのだろう、というのを子ども達と一緒に授業をやっていきます。流れを最初につくっていって、お金がどこにどのくらいかかるかというのを、金バッチでお金をつけていきながら子ども達に考えてもらいます。やるといっぱいお金がこうかかっちゃう。最終処分場つくるのにいくらだとか、ゴミを回収するガソリン代はいくらだとか。みんなの人件費はどうのこうのとか言いながらやります。子ども達も自分の買い物の中で、どんなにゴミが多いかなというのをもう一度振り返ってみます、いろんなゴミがあるなと。そのために処理するとこんなにお金がかかるんだ、というのを子ども達はここで気づいてきます。そうすると逆転してきます。子ども達、騙された、とここで気づきます。最初におつりの多かったチームは、ゴミ処理費を計算して引いていくと、あれ何かおつりが 412 円で一番多いと思ったのに、処理費を引かれると５位になってしまったとかですね。こういうふうにして順位が入れ替わっていきます。悪い大人達で、まず子ども達に失敗させて、俺の凄さをまず教え込むという手ですね。こういうのを教えながら子ども達に、ゴミを減らしていい買い物するにはどうしたらいいだろうという、いろいろアイデアを出してもらいます。アイデアを出してもらいながらこの黒板いっぱいに貼っていきます。いっぱいいろんなアイデアが出てきます。しょうもないのも出てきます。ドラえもんに任せるとか、宇宙ロケットで打ち上げるとか。あるいはもっと自給自足の生活をするだとかね。子どもなりに一生懸命考えてアイデアがいっぱい出てきます。

つぎに、もう１回子ども達にチャンスを与え、買い直しをさせます。今度は慎重になって、簡単に手を出さなくなります。もう騙されないぞと、いうことでもう一回買い物をしてもらって今度はざっとみんな処理費が減っていきます。残金も多くなります。何よりも子ども達のゴミ処理経費というのが減っていきます。そこで子ども達はやればできるというふうなことを学んでいます。その後、これからどうするだろう、お家に帰ってどうしましょう、というのを子ども達に考えてもらうようないろいろ意見を出してもらいます。

それでだいたいプログラムの流れは終わりですが、実際今度は現場で見てもらうのが一番いいかなと思っています。大事なのは、何度も言っているようにゴミの経費がいくらかかるとか、ゴミの処理のルートがどうということではなくて、ゴミ減量の行動をしてもらいたい。そういうやってくれる仲間を増やしたい。そのために、何をどの順序で伝えていけば、問いかけていけば、子ども達が動いてくれるのか、あるいは大人達でも動いてくれるのかな、というのを僕らは常に考えています。だから、本当の環境教育かどうかはよく分かりません。洗脳かもしれないですが、ただ僕らはそういった意味で、どうやれば人は動くだろうか、というのを考えながらやっていきます。これは、うちのスタッフにもほとんど話してないですが、買い物ゲームをつくる時に、どういうふうな順序で考えたらいいか、人はどうやれば動くのか、というのをある心理学の本から学んだのが、『理論と方法論と事例』の３つの要素を繰り返し伝えていけば、人はけっこう動きやすいんだぞと。これ覚えといたほうがいいですよ。特に彼氏、彼女をおとす時には。僕は成功事例ですけど。けっこう使える理論だなと思って。この理論を子ども達の今回のプログラムにも当てはめました。まず理論というのは何故そうなるか、というのを理解しやすいように話すということ。それから方法論。やり方がやっぱり分からないと、何をしていいのかが分からないと行動できないですから、その方法論は明確に出す。成功体験とかがあれば人はよく動きます。その事例も変化の前と、これをやる前と変化のきっかけと、変化の後どうなったか。こういったものを買い物ゲームでは、全部体験できるようにつくられていますね。変化の前、ゴミをいっぱい出してウワァーと子ども達に失敗させて、次にこんなにゴミが多いという話をして、こうすればゴミは無くなるよね、ということを子ども達に気づかす。気づいたら今度、やってみたくなりますよね、人間は、自分で考えたアイデアを試してみたくなる。それをさせていくということ。そしたら、やっぱりゴミが減った、２回目の買い物でゴミが減った。そうすると、そういう成功体験をしていくということで変わっていくだろうなという。ちょっといいかげんな理論ですが、そういった理論に基づいて構成されています。だから、先に理論から方法論を伝えるとけっこう分かりやすい。うわべだけの理解にとどまってしまうおそれが多い。特に、調べもの学習で子ども達はいっぱい分かっているようで、インターネットでもいろんなこと調べてよく知っているんですけども、全然行動は伴わないし、中身的に何故こうなっているかも理解してない子ども達が多い。ただ知って、ただ壁新聞かなんかつくっているというような、ただって言ったらまた怒られるね。そんな印象を受けることが非常に多いです。だから、僕らとしては方法や事例というより、体験とか、気づきをやって、その後で理論的なものを教え







ていくようなものが、行動に結びつきやすいだろうなというようなもので、その間に知識とか感情を。特にあの買い物ゲームは、グループで競い合いますから感情が出てきます。そこに訴えて行動させるという、ちょっといやらしいおじさんだろうなと思うのですが、そういったことを考えてプログラムをつくってきました。これもまさにそうです。最初に、子ども達の心が、ゲームの進む中でどういうふうに子ども達の心が変化していくのかなというのを、階段式にやっていっています。最初に買い物をして、後から先生に言われて、こんなにいっぱいゴミが出ているじゃないかと言われてゴミに気づく。ゴミに気づいたら今度ゴミを減らそう、減らしたくなっちゃう。減らしたくなる時にこういうふうにすればいいね、ああいうふうにすればいいねという方法論も子ども達が考えてみる。それを今度実際に買い直しして、体験してみて、やればできるのかもしれないという成功体験をもたせてやっていく、そういうふうなプログラムづくりをけっこういやらしくやっています。僕らとしてはさらにダメ押しで、こういうバネ秤を子ども達に宿題として持たせて、家庭のゴミを量ってきて下さいということで、家でもやらせるというような、しつこいプログラムとなっています。こういうので子ども達は、またお家の方、親と対話するわけです。家のゴミはこれだけ出ているねとか、こういうのをやる。親も一緒になってやる。子どもに言われると親もやらざるを得ない、というようなことで、少し地域が動き出せばいいかなということでやっています。実際に減っています。とりあえず徐々にゴミは減っていくというのが今までの統計で出ています。各家庭でもすぐアンケートをとらせてもらっていますが、約30%以上のところで子ども達の言動が変わった、子どもがゴミを気にするようになったとか、マイバック持っていこうよと、お母さん達に言うとか、ゴミの仕分けをお父さんに注意するとか、言動の変化が少しずつ表れているというのが子ども達、これはいいですね。

NPO はお金がないので、さっき言ったようにいろいろ大変ですということで、私達は毎年この買い物ゲームを実施する時にスタッフを募集しています。授業は2学期頃が中心になるもんですから、毎年セミナーを開いて、いろんな方に、特に主婦とか学生の方が多いですが、スタッフ養成をして、それで一緒に学校に行ってもらうようにやっています。今日、興味をもった方、一緒に参加してもらいたいと思っています。

宇栄原小学校では、一般のスタッフだけではなくて、お母さま方に一緒に授業をつくってもらおうということで、お母さん方と一緒にやっています。この写真の壁にピッタリひっついているのがお母さん達で、こちら側がうちのスタッフです。最初は、お母さん方も緊張して、2、3度うちのスタッフが一緒に練習して、授業ではこういうふうにやりましょうとやっていますが、子ども達が来ると緊張して、壁にひっついて、なかなかスムーズにいかないという面もありました。でも授業が始まって動きだすと、やっぱりお母さん達は子どもに慣れているので、どんどん話しかけていきます。そういうふうにして、学生が加わったり、お母さん方が加わったりする中で、単に子ども達だけの教育じゃなくて一緒にゴミ問題をどう考えていいのか、もっと大きくみれば地域をどう考えていけばいいのか、ということを一緒に話題にできる、一緒に育っていける場づくりに少しでも寄与していければいいかなと思って、こういうふうにいろんな人達の参加ができるような感じで行っています。

何のために環境教育するのか、僕も今まで環境教育とか簡単に使っていきましたが、あんまり環境教育って正直興味ないです。さっきから言っているように、僕が興味あったのはちょっとゴミを減らしましょう。もっといえば、自分が幸せになりたいから今やっているだけです。みなさ

んが、子ども達に何か伝えていく時に、教育学部の学生中心だと思って口幅ったいのですが。やっぱり何のために環境教育していくのかっていったら、一緒に生きてく周りの人達と、あるいはその前にこれから育っていく子ども達のために、一緒になんか生きていこうとする思いやりっていうものがとても重要だと思う。僕は今の事業する前はチリ紙交換やっていました。廃品回収です。毎度おなじみチリ紙交換です、ということで、いろんな家庭から、新聞紙、ビン、缶とか回収にまわっていました。その中で、こんなリサイクルはしたくないなという思いだったのが何件かあります。ある団地に行ったら４階からおばちゃんが、新聞の袋の中に新聞紙いっぱい入れて、「にーにー」と言って、４階からポーンって投げてね。下に落ちた新聞はバラバラですよ。そんなリサイクルだったらやらなくていいだろと思ったけど、プロですからいちいちきれいに集めてトイレットペーパーを４階まで上がって持っていったりしました。そういったものがまかりとおっていたり、あるいはゴミの出し方としても、新聞の袋の中に、弁当ガラがあったり、ひどい時にはネズミがそこで死んでいるようなものを平気で人にぼんぼん渡していくようなリサイクルだったらないほうがいい。そんなことで環境守るくらいだったらないほうがいいなと僕は思っています。だから、「思いやりのリレーを繋いでいく」って書いていますが、そういった思いやりを次々と伝えていくような教育であってほしい。たぶんそのことが大事だろうなと。思いやりを支えるためのインスピレーション、想像力、こんなことしたらどんな痛みがあるだろうかとか、人の痛みを感じられるような心、そういったものをきちんと育てるようなことを第一にやってもらえれば嬉しいなと思っています。ということでエコロジカルな市民社会をめざして、私、明日もまた頑張らせていただきます。ということで、ちょうど時間になりました。これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

島袋：はい、どうもありがとうございます。質問の時間を設けたいと思います。何か質問ありますか。

学生：エコロジカルな市民社会をつくろう、目指してっていうことで、環境に興味がある人はエコロジカルって聞いて、なんかすぐにこういうことだなって思い浮かぶと思うのですが、例えば環境セミナーとか、出前授業とかをやる時、特に環境のことについて考えていない人にその話をする時に、一番大切にしていることは何ですか。かどうやったら伝わりやすくなるのかなっていう…。

古我知：どうやって騙そうかなっていつも考えています。騙そうかなっていうか、興味ない者に興味もってもらうにはどうすればいいかっていうことですか。難しいなぁ。そのためにああいう子どものための教育プログラムをつくったりとか、企業の社員研修みの中でも関心のない人達にどうやって、どこから攻めていけば聞いてもらえるのかなというのは未だに苦労していて、どっかでウケをとらないといけないかなとか、いろんなことを考えていますが…。日々悩んでいます。ただ、できるだけよく言われていることですが、相手の話題に近いところから話をもっていくとか、あとは熱っぽくてウザイかもしれませんけど、なるべく情熱をもって語る。答えになっていませんが。

島袋：他にありますか。

学生：古我知さん自身が、エコロジカルな市民社会の実現をさせようということで頑張っていらっしゃると思いますが、そういうのを考えるようになった自分自身のきっかけはなんでしたか。

古我知：これは話せば長くなりますが、僕が学生の頃、インド、ネパール、パキスタン、アフガニスタンとか、ヨーロッパのほうまで旅行したことがありました。タイに行った時には安宿で泊まっていても、夜になったらおばあちゃんが現れて、中学生ぐらいの女の子の手をひいて、コンコンとドアを叩いて、この子買ってくれ、何ルピーでいいよとか。すごく驚きました。こんな、貧乏人のヒッピーのような旅行しているところの部屋に一軒一軒回って、自分の孫なのか娘なのか、さらってきた子なのか知らないけど、そういった子を売りに来るというのに、すごい衝撃を憶えました。何だろうと。次にバングラデシュに行ったら、バングラデシュにはイギリスのNGOがやっている学校に泊めてもらいました。そこでは午前中しか授業がなくて、午後になると子ども達は働きに行っている。午前中の授業といっても、教科書とか参考書があるわけではなくて、紙もない、地べたに座って棒きれで算数の計算をしているというような授業をやっている、そういうふうなのを見ました。ヨーロッパ行った時には、もうお金なかったので、道売りっていう、針金師っていうかアクセサリーを売っていました。道端、スーパーの前で、寒くて、雪がこんこん降るスウェーデンの田舎町でアクセサリーをつくって売っていると、それを買いに来るのは正直いって、今にも死にそうなおじいちゃん、おばあちゃんです。ボランティアが4、5人ついて、酸素を吸入しながらおじいちゃん、おばあちゃんが孫のクリスマスプレゼントを買いたいということで、買いに来る。これもすごいなと思った。ついこないだまでいたアジアでは子どもが売られたり、勉強したくても勉強もできないような子ども達がいたり、状況がいっぱいある世の中で、一方では、ゆりかごから墓場までじゃないですけど、そうやっていたれりつくせりの介護がついている。同じ地球上でもこんなに差があるのは何だろうな、というのを20歳前後の時に強く感じて、帰ってきて、大学卒業した時は普通にあまり就職する気がしませんでした。あんまり社会に迷惑がかからないような仕事をやりたいなと思って、探したのが廃品回収業です。そこから、その当時は別にそんなに環境とかリサイクルに興味なかったですけど、チリ紙交換しているといろんなものが見えてきたり、リサイクルという言葉にだんだんだんだん惚れこんでいったりですね、リサイクルというのかな。そういうふうに自分の仕事というものにだんだん惚れこんでいって、今のような活動をしていました。

そこでもう一段階エピソードがあって、よく講演会で使うネタですが、チリ紙交換していると、当時まだ20代ですから、業界のニューフェイスです。あーぎじゃびよー、お母様方にモテちゃって。若いお母さま方から「古我知さん偉いわね若いのに、こんな仕事一生懸命して」って。夏の暑い日は、ジュース持ってきて、お母さん方が「飲んでちょうだい、飲んでちょうだい」って言うんですよ。「うちの子にも、あなたの爪の垢でも飲ませてあげたいわ」って。翌月、行ったらそのお母さんの子どもが来て、「にーにーは勉強しないからこんな仕事しているんでしょう」って。お母さんが言っていたよって。「勉強しないとにーにーみたいな仕事しかできんよ」って、小学校4年生に、世間っていうものを教えてもらいました。そうかー、ダメなんだ、やっぱりこれじゃあ。その頃ちょっと僕も結婚しようかなと思っていたので、これじゃあ結婚できないかもしれな

いなと思ったりして。一人で 1t とか 1000 t のものを集めるよりも、みんなに訴えて何かやっていく。もうちょっと格好もつくような仕事もしないといけないかな、ということで徐々にそういう運動と仕事を兼ね備えた何らかの形をつくっていこうと。まだその頃日本には NPO という制度もなく、どうすれば、どんな組織をつくればいいだろうというのも分からずに、紆余曲折しながらだんだん今のようになっていきました。

島袋：はい、どんどん聞いていきましょうね。他にありますか。

学生：スライドショーの中で教師に対しての講座を夏休みにやっているってありましたが、人数があんまり集まらないって言ってらっしゃったんですが、それは希望者を募ってやっているんですか。その講座の内容は、今日自分達が習ったみたいな買い物ゲームが教員だけでできるようなそういう講座なのか、それともまた別の内容なのか知りたいです。

古我知：別ですね。2日ぐらいの日程で、だいたい本土のほうから専門の先生に来ていただいて、新しいプログラムを、そういった内容等々お話ししてもらってワークショップでつくっていくとか。それから NPO 側も入ってもらって、NPO 側のもっているプログラムとかそういったものを先生方に見てもらって、そのプログラムをみんなでたたいたり分解したりするというような講座とか、時によって、その先生の個性によってやる分野はいろいろ違ってきます。これは僕らの宣伝も悪いのですが、有料でやっているものですから、お金を出してそんな訳も分からん NPO がやっている授業なんか受けられるかという感じで、あんまり反応がよくなかったですね。でも来てもらった先生方はけっこう、いろいろ刺激になっているみたいです。先生方だけの集まりじゃなくて、いろんな NPO やら一般の人達も入って授業をつくるというその形態がおもしろいということでは。ただし、去年は赤字でやれませんでした。

島袋：他に何かありますか。

学生：スライドショーの最初のほうで、海の前に生ゴミがいっぱい捨ててあって、なんか離島っていうことをさらっと言ったような気がするのですが、最近見に行ったらあんまり状況が変わってなかったって。自分も行ってみたいので、場所を教えてもらえますか。

古我知：後でこっそり。

島袋：他にありますか。私のほうからいいですか。授業を最初につくっていく時に、4年生の授業の全体のプログラムをつくることに関わるのか、4年のどの時期あの買い物ゲーム的な、あるいはリサイクル市民の会がどの部分で関わるっていうことをどうやって決めているのか、4年生全体のプログラムとの関わり方についてお話を聞かせてもらえますか。

古我知：宇栄原小学校に関しては、そんなに関わっていないです、すいません。当初のスタンスとして僕らのプログラムを先生方がどう活用するか、考えていただいてそれで僕らができるもの

があったらやりますよと、先生方から来ないと僕らはやりませんよという姿勢が、ちょっと生意気にというか、あったものですから。他の団体ですと年間通してとか、半年ぐらいとかいうふうにやっているのですが、先生方が僕らのプログラムをやる時には父兄と一緒にというような形でその後僕らのプログラムをどう活用するかは先生方で考えて下さいと、やれるものがあればなるべくやりますよ、というスタンスで今やっています。

島袋：計何時間ぐらい関わりますか。

古我知：この授業、買い物ゲームっていう授業はだいたい２校時、90 分でおさまるようになっています。それを３クラス分。

島袋：事前・事後も何か関わりで？

古我知：事前に 2、3 回先生方へ説明して、関心のあるお父さん、お母さん方に集まってもらって、こういうふうに授業を進めるということで、プログラムの内容を説明して実際に体験してもらって覚えてもらい、授業を実施してもらいます。その時もまったくしらんぷりじゃなくて、うちのスタッフが各クラスについて先生を中心にお父さん、お母さん達が授業をつくっていくという形をできるだけとってもらっています。

島袋：グループ学習のスタイルでやるわけですよね。それでグループ学習の場合いろいろ話し合いをする時に、小学生に任せているのか、それともファシリテーションを誰かスタッフがやってあげるのか、グループ学習は基本的にどういう形でつくるのですか。

古我知：ファシリテーションをやる先生役の人がファシリテーションで問いかけをしていきます。今買ったものにゴミになるのってどんなのがあるだろうな、って考えてもらう。そうすると子ども達はいろいろ買ったものの中で、この箱ゴミかもしれないねとか、このトレーもゴミかもしれないねっていうことで子ども達に考えてもらいます。なるべく質問を出すような形で、質問を出せば何となく、人間の頭って考えようかなというふうに動いていくから。

島袋：グループごとに、スタッフが１人ひとり入るわけではないんですか。

古我知：ないですね。ただグループになってないグループもありますし、どうしてもグループに打ち解けない子どももいますし、それからどうやっても盛り上がらないグループ。中には、ケンカをしだすグループもありますから、そこをなるべくこまめに見て、何らかの声をかけるように、というようなことはあります。

島袋：なるほど。事後的に、家庭のゴミ調査をしていましたね。あれは１ヶ月とか３ヶ月とか何回か、なんていうか定点調査っていうのかな。何回かやるんですか。

古我知：基本的には、４週間とか、学校によっては２週間とかいうのを、バネ秤を貸し出して、それでチェックシートに書いてもらうということをやっています。

島袋：先生に任せるんですか。

古我知：そうですね。そこは先生に任せますが、これが先生方のかなり、けっこう負担らしくて。バネ秤も、返ってこないことがけっこうありますね。壊しちゃったとかね。いろんな子ども達いますんで。それで先生方にとっては負担なのかなっていうことで、バネ秤に代わる何かを考えないといけないと、課題はあります。

島袋：他に質問ありますか。次の週はワークショップして分かったこと、分からなかったことを明確化して、できれば関係図までつくりたいなと思うので、今のうちに質問して分からないところを潰していって下さいね。こういう授業の予算はどこの学校でもあるんですか。

古我知：ないです。

島袋：払いきれない学校もあるんですか？

古我知：NPO は、こういった案をつくるのはけっこう上手いんですよ。上手いけど、お金をどっから引っ張ってくるかとか、人をどうするかという手立てがなかなかね、日本の NPO は苦手。僕も苦手で、苦労しているのですが、僕らは県や那覇市の環境部の支援を受けて委託事業という形で行っています。

島袋：「くいまーる豚」はどれだけ儲かるんですか。

古我知：僕は儲かっていません。豚は正直言って足りないぐらい、豚のほうは売れていますけども、それでも月出荷が 40 頭ぐらいですから、規模的にはまだまだです。でもおかげ様で少しずつカタチが見えてきたかな。だから、環境問題に現場からやってみたいという人がいれば、どんどん一緒に参加してもらいたいなと思います。

島袋：沖縄の環境教育で宇栄原小学校は、先進的事例って聞いているのですが、他に環境教育の取り組みで優れている学校とかありますか。

古我知：学校というか先生がやっぱり熱心な所はすごくいいですね。異動されていたのでどこの小学校かわからないのですが。一度買い物ゲームをやらせてもらって、その後子ども達にゴミの追跡を各班でさせて、その後、１つの班はホームページつくってゴミ減量の宣伝をする、ＰＲのためのホームページをつくっている子ども達がいますし、劇をつくっているチームもありました。そうやって、環境教育だけではなくて、総合的にやって自分の地域を見直すような授業をつくっている先生がポツポツとけっこういらっしゃいますね。これには感動しました。

島袋：誰が入れ替わっても学校として制度化されていて、継続してできるっていう、そんな体制になっているところはなかなかないですか。

古我知：あんまり聞かないですね、僕もそんなにしっかりしているわけではなので、よく分からないですけど、銘苅小学校とかもいろいろやられているみたいです。今のところ、特にカリキュラムになっているわけでもそんなにないですし、やっぱり先生が関心ないと、やっぱりちょっとあれですね。

島袋：教育学部の大学教育の中のカリキュラムとして、大学教育の中で、自然環境教育コースの「環境教育学」は４年目で初めて設置されたということです。それで担当する先生がいらっしゃらなかったので、僕は社会科の先生で主権者教育っていうことに興味があって、それでこういう主権者教育の一貫としての環境教育を考えました。横山さんは、教育学部のなかで「環境教育」をカリキュラム化するべきだと言っていますが、そのことについてどう思いますか。

古我知：大学のことまで知らないですが、日本の中で環境教育っていうこと、世界的にもですけど、自然環境の部分がけっこう多いですよね。自然観察とか自然体験とか、けっこう欧米でも体系化されたプログラムがいっぱい出ています。僕らの買い物ゲームもそうですが、生活系の環境をどう考えていくか、それを上手くプログラム化しているものっていうのはまだまだ少ないです。大学のほうでも、自分達の生活を見直した中でやっていけるものっていうのを、もっと研究しないと、どっかよそ事になっているような、自然を学んでその体系が自分達のこの世界をつくっているということを分かるのも非常に大切ですが、生活環境と離れている部分もあるかな。もっとその辺も増やしてほしい。

島袋：古我知さんどうもありがとうございました。